

豊かな造形体験を活かし、自分らしい表現を追求する図画工作・美術

— 思いをつかみ伝え合う中で思考力・判断力・表現力を育てる —

1. 図画工作・美術で願う豊かな学びの姿

これまでの研究を通じ、本学校園の図画工作・美術の活動の様子や家庭および地域での子どもたちの様子を見た時、家族で美術館や図書館に行ったり、劇や音楽など芸術鑑賞をしたりする機会が比較的多い。また、家庭でも簡単なイラストや絵を描いて時間を過ごすという子どもも少なくないという実態がある。このことから、造形表現や鑑賞活動について親しみをもち、自分や友だちの表現のよさを肯定的に心地よいものとしてとらえていると考える。

反面、地域の活動に参加したり、友だちと一緒に自然の中で直接自然と触れたりする遊びの姿はあまり見られない。こういった体験の少なさが、造形表現で素材を十分に味わえていない様子や道具に十分に慣れていない様子に現れている。また、友だちどうしでかかわりをもちながら共同してアイデアを出しながら遊びやもの作りを構築していく経験の薄さが、考えや気持ちを伝え合ったり共有したりするコミュニケーション不足につながっているのではないかと感じている。

したがって図画工作・美術では、今までに積み上げてきた題材のもつよさはそのままに、学習活動の内容を整理し見直して、学力の要素のひとつとして示されている思考・判断・表現に関わる活動の場面を明確に位置づけ展開させることにより、「感性や想像力を働かせて手や体全体の感覚を働かせて」体験的に学び、自分や仲間の表現に取り入れていくことのできる子どもの育成をめざしたい。体験的な学習活動を通して、「生きる力」の育成のために、「自主性」「主体性」「社会性」「共感性」を伸ばしたいと考えている。

そこで具体的な「学びの姿」を次のように定義する。

- (1) 体験から感じ取り、体験を活かして自分らしい表し方（表現）を追求しようとする姿
- (2) 互いの考えを伝え合い、自分や仲間の表現を発展させようとする姿

授業後のふりかえり（抜粋）

- ① 上から紙をはって部屋や道をどんどん作っていったら、ダンジョンみたいになっておもしろかったです。むずかしかったところはカーブで、かいた絵にぶつけないようにすることです。それと、はりかたで、つなげるかつなげないかでなやみました。（3年生男子）
- ② 今日は何をするのか、とっても楽しみで、とてもウキウキでした。
小鳥を作ることになりました。今回は色をぬるのではなく、色紙を切ってはりました。切りはなしをしているときにも、アイデアがうかんできました。つばさにねがいを書くとき、少しまよったけど、鳥はきみどり色がきれいかなと思い、つばさには、「きみどり色の小鳥になりたい」と書きました。
色紙をもらって、さっそく作り始めました。もちろん、体はきみどり。みずいろのふくを着ていて、みどりときみどりのつばさで、しっぽにリボンがある小鳥。
くふうしたのは、みどりときみどりのつばさです。うまく切って、とてもがんばってはりました。みんな、とてもカラフルな小鳥を作っていました。（3年生女子）

ここで紹介した子どもの姿で、①からは、試行錯誤しながら自分のつくりたいものに手段を選択してせまろうとしている姿がうかがえる。試行錯誤の中で思考と判断は繰り返され、体験と一体化して自身が見つけ出した課題の解決に向かおうとしている。ただ、他者と自分の考えを比較したり共有したりすることはしていない。より高い表現につながるための判断を自分の思考の中だけで納めている点に物足りなさを感じる。また、②からは、つくり出す喜びを味わいながら、自分の感性を働かせて、イメージをふくらませ、色や形をデザインしている姿がうかがえる。ふりかえりの中で自分自身の活動をしっかりとらえており、友だちの表現にも強い興味をもってその制作過程や完成したものをよく見つめてい

るといえる。それだけに、互いの考えやしようとしていることを色や形、そこから生じるイメージを言語に表し、伝え合い、思考し、作品の上でも表現することがより高まれば、豊かに感性を働かせる場としての造形体験活動が深まるであろう。

2. 昨年度までの研究の経緯

(1) 幼小中の11年間一貫して大事にして育てていきたいこと

図画工作・美術では育てたい力として以下の点について着目して研究と実践および検証を行ってきた。

一つ目は「表現力」である。文部科学省から示されている「確かな学力」のひとつであり、自分の思いや欲求、願いなどを色や形に表すことを意味する。子ども一人一人がテーマをもち、用具や素材を選択活用し、自己実現の象徴としての作品を平面や立体で表すことができる。このような子ども一人一人の必要感に応じた多様な表現が可能であることが図画工作・美術の教科性を特徴づけている。この豊かな表現力は時として言語表現を補ったり支えたりする。また、言語活動を拠り所として、より豊かな表現を生み出す活動が「鑑賞活動」である。「鑑賞活動」は言語活動と深い関わりをもち相互に補完する関係にある。

二つ目は「鑑賞力」である。自分や友だちが造形表現する過程で見つけ出した表現のよさや、そのよさを支えている取り組みのよさを見つけ出す力である。そのよさは会話や文章などの言語活動によって伝わり共有されることを通して確認され、評価される。また、完成した作品から表現のすばらしさに気づいたり、背景にある伝統や文化、作者や時代の人々の生き方に触れたりすることができる。表現と一体化した鑑賞の活動は、「共感性」や「社会性」を培うことにつながると考えた。

以上の点から「体験したことを活かして自分らしい表し方を追求する力」「自分や友達の取り組みや作品のよさを感じる力」を掲げ、引き続き、11年間一貫して大事にして育てていきたい。

(2) 子どもをとらえるという視点で取り組んだことからわかったこと

幼児期の子どもは好奇心旺盛に身の回りの物事とかかわりをもち、五感全てで感じ取ろうとする。自分が感じたことや思ったことを素直に表そうとする。子どもたちは身近な「ひと・もの・こと」にかかわりながら、主体的に遊び、友だちと共有する体験を通して豊かな感性や表現力を培っていく。

この幼児期の子どもたちに、保育者や友だちとの安定した心のつながりの中で、豊かな感性や表現に対する意欲と態度をじっくりと育むことが、小学校の図画工作科で学ぶ基礎を充実させる。

小学校の図画工作科の中では、より主体的に自分を取り巻く「ひと・もの・こと」とかかわりながら、それらを自分自身と関係づけ、相互に関連させ、つくりたいものへの思いをふくらませながら、発想・構想する姿を充実させていくと考える。また、「鑑賞力」に関わって、「見る」「聞く」「考える」「話す」力の基盤を言語活動の中で獲得・充実させていく。

中学校の美術科の中では、自分自身の内面や自分を取り巻く「ひと・もの・こと」への働きかけが強化される。対象と出会い、対象から受けたものを自分の中でイメージ化し、拡げ、幾つものアイデアの中から表現したいことにせまる働きかけが可能となる。一連の造形表現活動に見通しをもって取り組み、作品として表現することができる。また、鑑賞の場では、言語活動を伴って自他の作品や歴史的な美術作品から人間のもつ表現のすばらしさを「感じ取る」力、また、それを自分の経験に基づいて受け止め、自分の考えを踏まえて「伝える」力を充実させていく。

これらを踏まえた上で、幼小中の子どもたちの発達段階の系統性を考えていくと、次のような力をとらえることができた。

①初等部前期ブロック

「仲間とともに造形遊びや表現活動する喜びを味わい、体全体の感覚を働かせて身近な素材や環境に触れ、よさや美しさを素直に感じ取る力」

②初等部後期ブロック

「所属する集団の中で色や形やイメージを基にして、表したいことについてかかわり合い、自分の考えや意図を明らかにするとともに、仲間の考えなどを取り入れ、自己の表現の可能性を拡げる力」

③中等部ブロック

「自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと、集団や社会に働きかけることもできる造形表現の構想をもち、その実現にむけて相互評価を取り入れ、習得した知識や技能を選択しながら表現する力」

3. 本年度の研究

本年度の研究の視点

(1) 思考力・判断力・表現力を明らかにする

①図画工作・美術としての「思考力・判断力・表現力」とは

中教審答申で示された学力観や、改訂された学校教育法に明示されている学力の要素の一つとして、「習得した知識・技能を活用するために必要な力」と定義されているのが「思考力・判断力・表現力等」である。その「思考力・判断力・表現力」については、本学校の図画工作・美術の学びの中で以下のようにとらえる。

思考力 … 表現したいことにせまろうとする時、直感的にまたは論理的に言葉や図・イラスト等を使って物事を考えることである。また、言いたいことがはっきりしない場合など、色や形や図に表して整理しながら考えることがある。アイデアスケッチなどが例として考えられる。このとき、思考と表現と判断は一体化して働いている。表現や鑑賞に関わって、直感的に感じたり、データに基づいて推測したり、情報を分析・評価・論述することも思考力が働く場であるといえる。また、その場で働く力そのものが思考力であるといえる。

判断力 … 感性を働かせて対象と向き合った時、様々な直感や思考等による発想を通して、自らのイメージを練り、表現することを決定する構想へとつながるものとして働く力である。何かを鑑賞する時、美しいと感じたり興味をもったりする力も感性的な判断力といえる。また、表したいものに合わせて材料や用具、手段や方法を適切に選択する力であり、鑑賞の場では色や形から意味を感じ取ったり、イメージしたことをもとに、表現の意図や作者の意図を読み取ったり、友だちの言葉のように自分に働きかけてくることに対して、理解したり、必要に応じて取捨選択したりする力であるといえる。

表現力 … 形や色を通して自分が見たことや感じたことや表したいことを表す力であり、図画工作・美術ではこれまで特に強調されてきた能力であり、教科の特性を強く主張するところである。また、自分を表すことだけでなく、自分を他者や社会とをつなぐ広義での「コミュニケーション能力」そのものであるといえる。

これらすべての能力は図画工作・美術では分断されることなく、一体化し、造形活動の中で自然に働いていく力であるといえる。

(2) かかわり合いの中で思考力・判断力・表現力を育てる

図画工作・美術の造形表現活動は、五感の働きと手の働きの連動によって常に変化と発展をくり返し進められていく。個人思考の視点で言えば、周囲の環境などの「場」や素材など「もの」とのかかわり合いの中で思考力・判断力・表現力は培われていく。また、イメージを拡げながら個人思考に基づいて試行錯誤を拡げるとともに、他者の表現活動やそれによる造形物とのかかわり合いの中で、発見や気づきを新たに獲得し、さらに創造性豊かな表現を求めていく。とり分け、子どもの世界では他者との深いかかわり合いの中で獲得される経験は造形表現にも大きな影響を与える。なぜならば、個人思考と比べて、言語活動を伴う友達とのコミュニケーションなどは、他者の経験を追体験したり、新たな気づきを獲得できたりするという点で、果たす役割とその効果が大変大きいからである。

①人とかかわる場面を大切にす

新学習指導要領で述べられている「言語活動の充実」は図画工作・美術においても大事にしたい。「言語活動」を通じて思考力・判断力・表現力等の育成を考える時、図画工作・美術では表現や鑑賞の学習活動の中では、「見る」「聞く」「考える」「話す」力の基盤について言語活動を通して育成すること

であり、表現と鑑賞の活動の中で、題材や活動をもう一度見直し、児童が友達とかかわる場面や教師が児童とかかわる場面において、働きかけたりまかせたりするねらいを明確に位置づけることが大切であると考えた。

また、図画工作・美術の特徴として指先や体全体を使って周囲の環境や材料や用具の体験をしながら、試行錯誤をくり返し、作りたいものにせまる活動は造形表現活動の基礎的・基本的な部分である。その上に立ち、相手に自分の意図を伝えるという活動を充実させていくことにより、自ずと自身の意図は明らかになり、新たな表現の可能性を発見するに至ると考える。さらに、個人思考では得難い経験が他者と深くかかわり合うことによって蓄積され、思考力・判断力・表現力は相互に作用し、より効果的に、瞬間的に同時発生的に培われていくと考える。

また、図画工作・美術での「話す」事に関しては、漠然としていることを色や形を手かがりにして、また、図やイラストに整理しながら、または、動作を伴って伝えるという事があり、その行為によって次第に考えがまとまったり、新たな発見を得たり、言葉以上に意図が伝わったりすることがある。

体験から感じ取ったことを表現すること、課題について構想を立て、実践し、評価・改善すること、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させることを、学習活動の中に明確に位置づけて展開させていきたい。

(文責 三桐 撰夫)